Charles Willemen ;

The Chinese Udānavarga

—A Collection of Important Odes of the Law—

大　窪　祐　宣

I

本書は、『法集要頌経』(T. 4. NO. 213)を英語に完訳したものである。これまで、この経典を全編にわたって翻訳した例はなく、わずかに、P. K. Mukherjee (The Dhammapada and the Udānavarga, I. H. Q. XI 1935, pp. 741–760)が第一章有為品を、また、S. Lèvi (L'Apramādavarga, J. A. 1920, p. 203ff.)が第四章放逸品を翻訳しているだけである。著者 Charles Willemen について全く知識はないが、ライデン大学教授であると聞いている。本書中の Bibliography (pp. IX–XII) に、著者自身の業績として左記の論文・著作が挙げられている。

* Dharmapada. A Concordance to Udānavarga, Dhammapada, and the Chinese Dharmapada Literature. Brussel 1974.
* The Prefaces to the Chinese Dharmapadas. Fa Chü Ching and Ch'u Yao Ching. T'oung Pao 59, 1973, pp. 203–219.
* Udānavarga. Chinese-Sanskrit Glossary. (中梵用語索引). Tōkyō 1975.

これらの業績から察するに、著者は『Dharmapada』に類する諸経典—特に漢訳の経典—の研究を、その専門としているように思われる。

II

『Dharmapada』に類する諸経典は、大別して次の三つの系統があるとされている。

(1) パーリ本 Dhammapada (Pāli Dhp.)
　法句経二巻 (T. 4. NO. 210)
　　法救撰　維祇難等訳
　法句譬喩経四巻 (T. 4. NO. 211)
　　法炬共法立訳
(2) サンスクリット本 Udānavarga (Uv.)
　出曜経三十経 (T. 4. NO. 212)
　　法救集　竺佛念訳
　法集要頌経四巻 (T. 4. NO. 213)
　　法救撰　天息災訳
　チベット本 Udānavarga (Tib. Uv.)
　　(東北 NO. 326, 4099)
　　Udānavargavivaraṇa (東北 NO. 4100)
(3) Gāndhārī Dharmapada

著者は、その Introduction において、これら諸経典のうち、漢訳四本についての詳しい説明を行っている。それを要約して紹介すると次のようになる。

まず、『法句経』は、西暦二四四年あるいはその少し後に維祇難によって訳されたものである。全三十九品のうち、中央部の雙要品から梵志品までの二十六品（利養品を除く）は、その品名も偈の順序も Pāli Dhp. と対応している。この中央部分を境にして、それに先立つ部分は Uv. からの訳が付加されており、それに続く部分は Suttanipāta 等の他の経典からの訳が付加されたものである。このように『法句経』は、Pāli Dhp. に対応する部分が原初の内容であり、それを中心にしてその前後に Uv. 等の偈を付加して拡大されたものである（pp. XIII–XIV, XVII–XIX）。このことは、Pāli Dhp. から訳された偈が四言句（tetrasyllabic）であり、Uv. から訳された偈のほとんどが五言句（pentasyllabic）であること、また、後半部分にいたってはすべてが五言句であることからも、明らかとなる。五言句は四言句より新しいと思われることから、後半部分は、後代になって付加されたものであることが明らかである（p. XIV）。

『法句譬喩経』は、晋の時代に法立と法炬の二人によって著わされた。これは『法句経』の原初の部分から偈を集め、それに譬喩（avadāna）を付加したものである（pp. XV–XVI）。

『出曜経』は、法救（Dharmatrāta）所集の Uv. の偈と、それに対する譬喩とを、Saṃghabhadra と竺佛念とが訳したものである。一般的に、『出曜経』の偈は、『法句経』の偈をそのままの形で、あるいは四言句を五言句に変えるなどして、偈の訳の大部分を借用していると言える。このことは、竺佛念が Uv. を一つの Dhp. として考えていたからであり、『法句経』と重複する偈の大部分は、当時すでに存在していた『法句経』の訳から借用したのである（pp. XIX–XXI）。一方、その譬喩の部分は、偈が漢訳される時に漢訳者自身によって付加されたのではなく、譬喩自身インド起源のもので、それを訳したものである（p. XXI）。

『法集要頌経』は、法救が撰択した Uv. を天息災が訳したものである。漢訳四本のうち最も新しいもので、西暦九八五年に完成した。『法集要頌経』は、その漢訳にあたって、『出曜経』の偈の訳をそのままの形で、あるいは五言句に変えて借用している。さらに、現存する Uv. には見当らない偈で、『出曜経』の譬喩の部分に含まれる偈をも、そのままの形で借用している場合もある（pp. XXVI–XXVII）。『法集要頌経』は、それ自身 Indian Origin を持ちながらも、翻訳する際に『法句経』『出曜経』の訳を借用したのである。その Indian Origin は、Tib. Uv. に近いものであったのであろうし、さらには、Uv. の根本説一切有部（mūlasarvâstivādin）に属する訂正本にも近いものであったのであろう（p. XXVIII）。

一方 Uv. は、『大毘婆沙論』（T. 27. p. 1b）・『倶舎論』（T. 29. p. 1b）・『大智度論』（T. 25. p. 307b）に説明があるように、婆沙の四大論師の一人大徳法救によって編集されたものである（pp. XXV–XXVI）。Uv. の偈は、『坐禅三昧経』（T. 15. pp.

279c–280a)・『大智度論』(T. 25. p. 316a)・『十住毘婆沙論』(T. 26. p. 92a)に『法句経』の偈として引用されていることから、Uv. は有部 (sarvāstivādin) の Dhp. として考えられ、十二分教の第六支 udāna であった (p. XXIII)。

以上、Introduction を大まかに紹介したが、著者は、これらのことを詳しく例を挙げて説明している。

Ⅲ

以下は、本書の構成である。

Acknowledgments
Abbreviations
Bibliography
Introduction
Chapter 1. The Formed—Chapter 33. The Brāhmin
Chinese Text

著者は、この『法集要頌経』を英訳するにあたり、その注の中に他の経典における対応偈の出典箇所を示している。おもに、Uv., Pāli Dhp.,『出曜経』・『法句経』・『法句譬喩経』におけるものであるが、必要に応じて、Gāndhārī Dhp., Suttanipāta, Udāna, Jātaka, Itivuttaka, Netti-ppakaraṇa, Thera-Therī-Gāthā, Milindapañha, Mahāvastu, Mahāparinirvāṇasūtra, Catuṣpariṣatsūtra 等における出典箇所を適宜示している。また、これら諸経典の偈と対比して、『法集要頌経』における語句の訂正を行っている。一方、佛教特有の語句の説明に関しては、左記の著名な論文や辞典をその根拠として挙げている。

* L. de la Vallée Poussin; L'Abhidharmakośa de Vasubandhu.
* E. Lamotte; Le traité de la grande vertu de sagesse de Nāgārjuna.
* (Idem); Histoire du boddhisme Idien.
* F. Edgerton; Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary.

さらに、漢語の理解については、次の論文をその根拠として挙げている。

* B. Karlgren; Grammata Serica Recensa.

Ⅳ

以下において、筆者が翻訳に問題があると思う箇所を指摘し、その訂正私案を示す。

Chap. 1. B "widely expounded"

「広説」(T. 4. p. 777a)

この「広説」と言う語句は、梵語の "vistareṇa+√vac" に由来する。また、この語句は「略説」の反語であることから、「広」は "widely" よりも、むしろ "in detail, with particular" の意味である。『出曜経』に「広説深法上中下善義味微妙」(T. 4. p. 610a) とあることからも、「広説」は「詳説」の意味である。故に "expounded in detail" と訳すべきである。

Chap. 1. 16 "Man also goes on nurturing life."
(T. 4. p. 777b)
Uv. 1. 17 "(evaṃ rogair jarāmṛtyuḥ) āyuḥ prāpayate nṛṇām"
Dhp. 135 "(evaṃ jarā ca maccā ca) āyuṃ pācenti pāṇinam"

「去」の語を"go on (nurturing)"と、継続の意味として訳している。しかし、Uv. や Dhp. では「死」を意味する文になっている。故に、次のように訳すべきである。

"Man also nurturs life and (at last) dies."

Chap. 1. 23 "biases"
「漏」(T. 4. p. 777b)

「漏"āsrava"」に対して"bias(es)"と言う訳語をあてている箇所は、他にもある。

1. 27, 2. 11 & 16, 4. 18, 6. 9, 7. 5, 11. 1, 13. 14, 15. 10, 19. 4, 24. 8, 25. 12, 31. 26, 32. 22, 33. 5 & 50

「漏」は、煩悩"kleśa"の異名の一つで、煩悩の作用を表わす術語である。『倶舎論』(T. 29. p. 108a) に「有情久住生死、或令流転於生死中従頂天至無間獄、由彼相続於大瘡門泄過無窮故名為漏」とあるように、「漏」には、「住"√ās, āsyati"」と「流"ā+√sru, āsravayati"」との二つの義がある。煩悩は、有情を生死の世界に留住させるから「住」であり、生死の世界を流転させるから「流」である。また、煩悩は、常に六瘡門から不浄を流出するから「流」でもある。一般には、後者の、六瘡門から不浄を流出する煩悩の作用を表わしていると解されている。

著者は、この「漏」を"bias(es)"と訳している。この"bias(es)"は、「歪み、傾向、性癖、偏見」と言う意味であろう。著者は、この訳語を用いた理由を何も挙げていないのではっきりしないが、たぶん、人間の心に潜在する歪み・邪悪な性癖の意味を表わそうとしたのであろう。

一方、Edgerton は B. H. S. D. で"evil influence"を挙げている。「邪悪なる影響力・作用」と言う意味であろう。この"influence"の原義は"flowing in"で「流入」の意味をも表わしている。

ところで、L. Alsdorf は Les études jaina, état présent et tâches futures (Paris, 1965, pp. 4-5) において、"āsrava"は、的確には「流入」を意味すると指摘している(印佛研・二七巻・一号・pp. 158-159 参照)。このことより、"āsrava"と"influence"との間には、何らかの類似点があると思われる。訳語としては"evil influence"の方がより適切である。

Chap. 2. 1 "In my mind you are produced by thoughts."
「意以思想生」(T. 4. p. 778a)
Uv. 2. 1 "saṃkalpāt kāma jāyase"

この「意」は、Uv. に"kāma"とあることから、「欲意」

を意味する。故に、次のように訳すべきである。

"O, mind (of desire), you are produced by thoughts!"

Chap. 2. 15「無楽有何憂」(T. 4. p. 778b)

この部分の訳が欠損している。故に、次のような文が補足されるべきである。

"Someone who does not know pleasure, what grief would he know?"

Chap. 2. 17 "beauty"

「色」(T. 4. p. 778b)

「色"rūpa"」に対する訳語として"beauty"を挙げている箇所は、他にもある。

1. 29, 5. 8, 27. 6, 30. 39

確かに「色」には"beauty"の意味が含まれうる。例えば上記の箇所のうち、1. 29 では Uv. 1. 29 に"manoramam bimbam"とあるのに該当するから、また、5. 8 ではその直後に「金色」(T. 4. 780a) と言い換えられていることから、"beauty"と訳しても良いかもしれない。しかし、2. 17 の場合その後に「無常」(T. 4. p. 778b) と説明されており、また、27. 6 では「衰耗法」(T. 4. p. 791b) の言い換えにあたっている。また、30. 39 では「貪」(T. 4. p. 795a) の対象として使われている。故に、これらの場合の「色」は、五蘊の一つである色蘊を表わし物質的存在の総称である。"form"等の訳語を付ける方が妥当である。なお、上記以外の箇所にも「色」の語が現われ、場合に応じて種々に訳されている。

5. 10「善色」"the shape of what is good", 20. 1, 32. 11「名色」"name and form", 22. 4「色相」"forms", 22. 14, 29. 11 "appearance", 29. 10 "complexion".

Chap. 4. 9 "Once the right view strengthens the path and what is worldly is examined with knowledge,"

「正見増上道　世俗智所察」(T. 4. p. 779a)

Uv. 4. 9 "samyagdṛṣṭir adhimātrā laukikī yasya vidyate"

ここでは、Uv. に従って次のように訳すべきである。

"The right view, (although) cotemplated by the worldly knowledge, is the foremost path."

Chap. 4. 15 "These circumstances are not brought about by themselves! I know for sure that they are not brought about by themselves."

「本情不自造　情知不自為」(T. 4. p. 779b)

『出曜経』に「本性不自造者、所応造者不造所不応造者反更造」(T. 4. p. 641c) とあることから、次のように訳すべきである。

"What is true they don't perform by themselves, and

what to be known truly they don't know by themselves."

Chap. 4. 39 "If you rely on this vinaya law,"

「依此毘尼法」(T. 4. p. 779c)

Uv. 4. 38 "yo hyasmiṃ dharmavinaye"

この偈は、Thera-gāthā. 1. 257, Dīgha-nikāya. II. 121 等に見い出される偈と対応している。そして、これらの偈は Magdalene und Wilhem Geiger ; Pāli Dhamma (p. 57) において、"dhammavinaya" と言う Compound を Dvandva として読む例として挙げられている。故に、この「毘尼法」も「毘尼」と「法」と読むべきである。

"If you rely on this vinaya and law,"

Chap. 5. 7 "When the dear, friends and many relatives, go to the next world, one's grief is deep during long nights,"

「愛念就後世　朋友多親眷　長夜憂愁恨」(T. 4. p. 780a)

Uv. 5. 7 "priyaṃ mṛtaṃ kālagataṃ jñātayaḥ sahitāḥ sthitāḥ/śocanti dīgham adhvānam"

Uv. を参照して、次のように訳すべきである。

"When the dear goes to the next world, his friends and many relatives grieve and regret durig long nights,"

Chap. 5. 9 "when night and day a man is at rest,"

「若人処昼夜」(T. 4. p. 780a)

Uv. 5. 11 "ye vai divā ca rātrau caivāpramattāḥ"

『出曜経』に「若人処昼夜者、専精一意断欲界欲愛永尽無余、昼則勤精夜則諷誦」(T. 4. p. 652a) とあることから、「処」は "be at rest" の意味ではなく、Uv. に "apramatta" とあるように "strive" の意味である。

"When night and day a man strives,"

Chap. 5. 10 "When one says that happiness is associated with beauty, he does so out of negligence."

「若謂楽著色　放逸之所使」(T. 4. p. 780a)

Uv. 5. 11 "duḥkhaṃ sukhasya rūpeṇa pramattān abhimardati"

「若」は、『出曜経』に「苦」(T. 4. p. 652a) とあり、Uv. に "duḥkham" とあることから、「苦」の誤植である。著者は、しばしば誤植を指摘しながらも、翻訳にあたっては訂正せずに行っている。訂正しなければその偈の意味が他の経典の対応偈と相違する場合、訂正して訳すべきである。

"When the suffering is said to be like what showes happiness, one is tossed by negligence."

Chap. 8. 5 "goes in accordance with his thoughts to a woeful destination,"

「合意向惡道」(T. 4. p. 781b)

この「合」は、『出曜經』に「令」(T. 4. p. 665b) とあることから、「令」の誤植である。

"lets his mind go to a woeful destination."

Chap. 10. 3 & 5 "Among believers the holy man is the greatest. He dwells in mindfulness to the law."

「信者貴人長　念法所安住」(T. 4. p. 782a)

Uv. 10. 3 "śraddhā hi vittaṃ puruṣasya śreṣṭhaṃ dharmaḥ sucīrṇaḥ sukham ādadhāti"

『出曜經』に「如此衆行信為原首、是故說曰信為貴人長也、念法所住安者、念法之人当受快楽」(T. 4. p. 673b) とあることから、Uv. をも参照して次のように訳すべきである。

"Belief is the best conduct of the holy man. It is the mindfulness to the law where happiness is dwelling."

Chap. 13. 6 "He who can speak of satisfaction,"

「能論知足者」(T. 4. p. 783c)

Uv. 13. 6 "etaj jñātvā yathābhūtam"

出曜經「能諦知是者」(T. 4. p. 689b)

「論」は「諦"yathābhūtam"」の、「足」は「是"etad"」の誤植である。

"He who knows it truly,"

Chap. 21. 3 "Honoured among the gods and in the world thus have I come."

「如来諸天世中尊」(T. 4. p. 787b)

Uv. 21. 2 "tathāgato devamanuṣyaśāstā"

「如来」は「真如より来れる者」と言う意味で、佛陀の尊号として見るべきである。著者自身、Chap. 21. 9 では"tathāgata"と訳している。

"Tathāgata is the most honorable among gods and (men) in this world,"

Chap. 21. 8 "The wise man does not judge the fool,"

「智人不処愚」(T. 4. p. 787c)

Uv. 21. 7 "na hi santaḥ prakāśyante"

著者は「処」を"judge"と訳しているが、Uv. に"prakāśyante"とあることから、"appear"の意味である。

"The wise man does not appear in front of fools,"

Chap. 28. 29 "Even though people may say that it is without punishment when done in public,"

「人作言無罪（屏隈言無罪）」(T. 4. p. 792c)

Uv. 28. 30 "cirakṛte dūrakṛte'pi nāśvaset"

出曜經「久作言無罪」(T. 4. p. 746b)

「人作」は Uv.、『出曜經』に「久作"cirakṛta"」とあることから、「久作」の誤植である。また、この偈と対になる

Chap. 28. 30 に「久作」(T. 4. p. 792c) とあることからも明らかである。著者はあえて原文を生かそうとするため、次の「屏隈」と対比して「人中 "in public"」の意味で訳している。このような明らかな誤植の場合、訂正して訳すべきである。

"Even though people may say that it is without punishment when done long ago."

Chap. 29. 34 & 35 "and a śramaṇa has no heretical ideas."

「沙門無外意」(T. 4. p. 793c)

Uv. 29. 38 "śramaṇo nāsti bāhyakaḥ"

Dhp. 254 & 255 "samaṇo natthi bāhire"

Dhp. における "bāhira" について、Buddhaghosa (Dhp. A., III, p. 378) は "mama sāsanto bahiddhā maggaphalaṭṭho samaṇo nāma natthi" 「私の教えの外には、八道果を持つ沙門と呼ばれる者はいない。」として、外道の意味にとっている。しかし、Max Müller (The Dhammapada, S. B. E., X, p. 64) や中村元氏 (『真理のことば』p. 45 & pp. 117-118) は、「内面的 "internal"」に対する「外面的 "external"」と言う意味でとらえている。Buddhaghosa の解釈は、後世に教団意識の高揚の影響を受けたからであるとしている。

『法集要頌経』では「外意」としていることから、後者の「外面的なことに気をかけること」を意味していると見るべきである。

"and śramaṇa has no ideas about external things."

Chap. 30. 21 "and not to perform any evil action."

「不造衆悪業」(T. 4. p. 794c)

Uv. 30. 20 "pāpasyākaraṇaṃ sukham"

出曜経「不造衆悪業」(T. 4. p. 755b)

この「業」は、Uv.,『出曜経』また『法集要頌経』の宋・元・明の三版に「楽 "sukham"」とあることから、「楽」の誤植である。

"and not to perform any evil (things) is happiness."

Chap. 31. 13 & 14 "The eminence of the mind is caused by the mind."

「心尊是心使」(T. 4. p. 795c)

Uv. 31. 23 & 24 "(dharmā) manaḥśreṣṭhā manojavāḥ"

Dhp. 1 & 2 "(dhammā) manosetthā manomayā"

「是心使」は、Uv. では "(dharmā)...manojavāḥ" 「(物事は) 心によって疾動す。」、Dhp. では "(dhammā)...manomayā" 「(物事は) 心より成る。」に対応する。故に、これらを参照して次のように訳すべきである。

"The mind is surpassing, and has influence on (everything)."

Chap. 31. 35 "The most victorious has good eyes."

「最勝得善眼」(T. 4. p. 796a)

Uv. 31. 47 "sukhaṃ svapanti muṇayaḥ"

出曜経「最勝得善眠」(T. 4. p. 763b)

「眼」は、Uv.,『出曜経』と「眠"svapanti"」とあるから、「眠」の誤植である。

"The most victorious sleeps well."

Chap. 32. 22 "If he does not correctly bring about that his concentrated mind is not attached to decoration, then the bhikṣu through the power of keeping the precepts and through great learning in the meaningful has something on which he depends, and ends deeds without bias."

「不以持戒力　及以多聞義　正使得定意　不著於文飾
莅彻有所倚　尽於無漏行」(T. 4. p. 797a)

この英訳は難解である。また、偈自体も解読しがたい。『出曜経』に「夫人習行不但精進忍辱一心智慧求於解脱、亦復不以多聞解慧、知内外法至於無為要得世俗定意、然後至於妙際」(T. 4. p. 767a) とあるので、これを参照して、次のように訳すべきである。

"It is not through the power of keeping the precepts or through great lerning in the meaningful, that one can get into the concentration in mind. Don't attach to what is decorated! The bhikṣu must rely on (this concentration), then he can accomplish deeds which are without evil influence."

Chap. 33. 43 "When by himself he cannot know gods, men, or gandharvas,"

「自己識不知　天人彦達嚩」(T. 4. p. 799a)

Uv. 33. 46 "gatiṃ yasya na jānanti devagandharva-mānuṣāḥ"

『出曜経』に「当佛如来坐禅之時、諸天世人竟不知佛今為所在」(T. 4. p. 772c) とあることから、「不知」の主語は「天人彦達嚩」である。Uv. を参照して、次のように訳すべきである。

"He whom gods, men, and gandharvas cannot find by themselves, (and who can know immeasure contemplation. I call him a brāhmin)."

以上、筆者がその翻訳上問題であると思われる箇所を示し、その訂正を試みてみた。なお若干の問題点もあるが、煩雑になるため省略した。

V

本書における翻訳上の問題点として特に重要なのは、原典批判の結果をその翻訳にあまり生かしていないと言うことである。

『法集要頌経』には、他経典との対比を行なうと、字句の明白な誤りが数箇所見い出される。著者はそのたびに、その注の中で誤字の訂正を行っている。しかし、いざ翻訳の段階になると、若干の例外（例えば Chap. 21. 1, 33. 37, etc.）を除いては、ほとんど大正大蔵経に収められている原文をそのまま翻訳している。本文の誤りを認めながらも、翻訳においてはそれを無視し、あくまで原文を生かそうとしている。そのため、その翻訳においては作意的な操作が見られ（例えば、Chap. 28. 29, etc.）本来あるべき文意が失われている。

このことは、本書が今後の佛教学研究（特に欧米における）に利用される際に、誤解を与えてしまうことになる。原典の翻訳に際しては、原典批判を正確に行い、その結果をふまえて、本来あるべき文意の翻訳に務めるべきであると思われる。

本書は、冒頭でも述べたように、『法集要頌経』の全訳である。これまで Dhp. に類する漢訳経典四本について、それらの欧米語への翻訳は部分的には数々行われたが、全訳を行ったのは本書が最初である。このことは、欧米諸国における Dhp. 類経典研究に対して、大きな刺激を与えるものであり、また逆に、その研究の進歩を示すものでもある。

（Mélanges Chinois et Bouddhiques, Volume XIX, Institut Belge des Hautes Études Chinoises, Bruxelles, 1978, XXVIII-184 pages）